

多分何かあったけどひとつも覚えてない のに、身体は既に落とされていた俺の話

体験版

ゆるめバリタチお兄さん×ちょっと抜けてるノンケ君

受け：間宮

攻め：アキ

要素：ノンケ受け、前立腺責め、トコロテン、連続絶頂、焦らし、密着寝バック、立ち膝バック、キスハメ

知らない場所で目が覚めた。ベッド上部に備え付けられた時計には、AM8時と表示されている。とはいえ、今日は休みなので起床時間はもっと遅くてもいい。問題なのはここじゃない。

事後っぽい匂いのしみついたベッドに、全裸で寝ていた自分。そして隣には、覚えのない全裸の男。分からない。なんで男が2人、ホテルの部屋で素っ裸で寝ているんだ。ヤったのか？やるわけないよな？だって男だぞ？俺もこの人も。ていうかこの人はそもそも誰なんだと、冷や汗を流して彼を見る。すると少し長い

前髪の間から、隣の男性が目を開くのが見えた。起きがけに俺を見て、ふと微笑む彼は男の俺から見ても綺麗だったが、意味深な笑顔は恐怖でしかない。

「おはよう。昨日は凄かったね」

そして僅かに掠れた寝起きの声で、一番良くない予想が当たりそうな言葉が聞こえてきた。待て待て、何が凄かったんだ。気になる。とても気になる。あと俺は、覚えてないけれどおそらく当事者だ。

なんで俺は、見知らぬホテルでこの人と一緒に寝ているんだ？

本当に分からない。めちゃくちゃ重要なことなのに、マジで何ひとつ覚えてない。

「...ふうん？じゃあ間宮君、俺とあんなことしておいて何も覚えてないんだ？」

「いやほんとに...。本当にすいません...」

とりあえず今の俺に出来ることは、誠意を見せることしかなかった。なのでそそくさとパンツを履いてから床に正座し、自分が彼とのアレコレを何も覚えていないと正直に白状すると、え〜と呑気な声と一緒に男性が体を起こす。

むくりと上半身を起こした彼は、タバコ吸っていい？とこれまた悠長な質問をしながら、俺の返事を待たずに電子タバコを手を取った。それから大きく煙を吸い込んで吐き出す様子は、慣れていて大人っぽい。

だがしかし、俺には分からない。目の前で足を組み、ベッドの上から俺を見下ろす、ちょっと緩い雰囲気の綺麗系お兄さんが誰なのか。

ひやりとする空気の中、お兄さんは2口目の煙を吸い込んだ。そして吐き出すのと一緒に、俺にいくつか質問を投げってくる。

「ここでしたことは覚えてなくてもさ、その前は覚えてるでしょ？俺と一緒にここ来たこととか」

「それも覚えてないです」

「バーで話したのは？」

「...それも覚えてないです」

「なら、俺と飲み屋で話したのは？」

「飲み屋...？駅前の、ちょっと安めの...？」

「そう、そこ」

彼からの質問のうち、ほとんどは記憶にないものだった。けれどより過去に遡っていくと、俺の記憶と合致する場所にたどり着く。

おそらく彼の言う居酒屋は、俺がたまに一人で行く店だ。カウンターがあって入りやすいし、値段も手ごろで、料理もそこそこ美味しい。ただ、昨日の俺がそこに行った理由は、あまりポジティブなものではない。だから、その場所でとにかくあびるように飲んだのは覚えている。そしてなぜかお兄さんは、俺が酒に逃げたかった理由を知っていた。

「居酒屋に行ったのは覚えてるってことは…。本当は一緒に旅行に行くはずだった彼女が、3股かけててがっつり浮気してたから、ショック過ぎて飲んで忘れようとしてたことは覚えてんの？」

「覚えてます」

お兄さんは、俺が彼女と別れたことを知っていた。しかも別れたというか、浮気事件が発覚したのは昨日の夕方だ。だからそれを知るのは、この世でごく僅かな人数しかいない。親しい友達にも、心の傷が深すぎてまだ話していないのに、それを彼には話したのか。

なるほど、では俺は覚えていないけれど、どうやらたまたま居酒屋で相席した彼に、昨日の出来事を話したのかもしれない。知らない人にでもいいから話を聞いてほしいと、酔った俺が失恋話をした可能性は十分にありえる。

でもそれが、このホテルに行きつく理由になるのか。肝心なのはそこだと、俺は分からないまま彼を見つめた。するとお兄さんは、困惑した俺を悪戯っぽく見つめて、またひとつ煙と一緒に真実か嘘か定かじゃない言葉を吐く。

「じゃあさ。その後仲良くなってバーに行って、泣いてる間宮君に『彼女じゃなくて俺で発散したら』って言ったら、ノリノリで俺をここに連れ込んだことは覚えてんの？」

「えっ！？」

「まあでも～？覚えてなくても、やることはやったんだよね～。それが分かったから、間宮君もこの状況見て焦ってんでしょ？」

ふふ、と楽しそうに笑う彼は、最初は天使に見えたのに今は悪魔に見える。俺は彼の言葉を信じたくないけれど、否定できる材料があまりにもないので頭を抱えた。記憶の引き出しが空っぽなのに、脳内はひたすら大混乱だ。

マズい、とんでもなくマズい。覚えてないけど、俺やっぱこの人とヤっちゃったのか！？と、涙目でお兄さんを見つめる。

「あんなこととか、こんなこともしたのになあ、なんも覚えてないのかあ」

「あえ、や、やったんすか俺ら！？あの、雰囲気はそうかもですけど、でも俺マジで覚えてなくて」

「寂しいなあ、覚えてないなんて。慰めてくれるんですかって、自分から俺に泣きついてきたくせに」

電子タバコを吸い終えたお兄さんは、吸殻を灰皿に捨てた後、ふわりと横目で俺を見た。それから床に座る俺の両手を引っ張り、自分の横に座らせてくる。近くで目線が合うと、整った顔がよく分かった。長いまつ毛に、艶めく肌。男とは分かるものの、中性的な顔つきで、写真の加工がなくても綺麗だ。でも、やっぱり男だ。特に身体が。筋肉がついているし、言い逃れのできない中心部がある。あと、たまたま近くにあったゴミ箱が見えたが、中に入っていた。白濁液で内部が満たされたゴムが。つまり、どちらかが入れて、その中に射精したんだ。

ざあっと血の気が引く。これは本気で俺たちに何かあったらしい。そう思って混乱のピークに達したとき、トン、と俺の肩が押された。

「そんなカチカチにならないでよ。別に俺、そこまで怒ってないよ？」

「でも、俺は」

「はいはい、そうだね。覚えてないね。だけど間宮君。君の記憶にはなくても、身体は覚えてるかもよ？」

「え？」

そっと押し倒されると、一瞬脳がぐらりと揺れた。それがベッドに頭が付いた衝撃によるものなのか、下から彼を見上げる光景になにか引っかかるものがあるのか、何とも言えない。だけれど俺の下着の上から尻を撫でるお兄さんは、俺の知らない全てを覚えている。その彼の指が、俺の下着をするりとずらして、指先を孔に当ててきた。

「俺もせっかくよかったのに、相手はやるだけやって覚えてないじゃ嫌だから。間宮君にはここでイキまくってたこと、ちゃんと思い出してもらわなきゃ」

「ふぁ、あうっ！？」

お兄さんの言葉と一緒に、ぬるんと俺の中に指が入ってくる。それに驚くのもそうだし、俺の口から出てきた変な声にも驚く。慌てて口を覆ったけれど、よく考えたらもっと守るべきなのは下半身だった。だから急いで足を閉じたのに、太ももをさすられたら勝手に力が抜けていく。

「っ、や、だ、何、何して」

「こおら間宮君。足は閉じちゃダメって言ったでしょ？てか、下着もいないよね？」

「や、あ、あっ...!？」

するすると脱がされていく下着にも、従順すぎる身体も意味が分からない。なんで俺は、見ず知らずの男の言いなりになっているんだ。というかヤツたにしても、俺が抱かれる方だったとは思わなかった。俺にそんな趣味はないのに。ていうか失恋の傷を埋めるなら、俺が抱く側じゃないのかよと、2度も指を入れられないように彼の手首を掴む。

「ま、待って！なんでっ、俺が下!？」

「なんでって言われても？こんなエロいお尻持ってる間宮君に、俺が抱けるわけないじゃん」

「くふ、ッ、あ、あ、っっ!!？」

けれど掴んだ手の先が、くちくちと俺の孔をくすぐる。それだけで縁がヒクついているのを自分でも感じた。ありえない、なんでこんな欲しがってんだよと混乱していると、力が入りきらずにお兄さんが指を進めてしまった。

ぬるんと入ってきた指先に、思わず吐息が漏れる。なぜか力の抜き方を知っている身体が、彼の指を奥に誘っているのが不思議で仕方ない。

「あっ、は、はう...!んふ、う、う...っ!？」

「そうそう、上手。昨日言ったこと、ちゃんと覚えてるじゃん」

「は、あ、あ、やっ、も、抜いて...!」

「抜かないよ？ほらほら、中ヌルヌルだからどんどん入っちゃう」

「んんううっ！！？」

それに、意味不明なことは一個じゃない。俺の中がヌルついているのもおかしい。女じゃないから濡れる機能は備わっていないので、どこかで人工的なものが入れたとしか思えない。なんで俺の孔の中がこんなにヌルついてるんだ。マジかよ、俺、マジで昨日この人に抱かれたのかよと、分からないままに彼の腕を握った。これ以上開けてはいけない記憶の箱を開けてくれるなと首を振る。けれど俺を翻弄する指先は、決定打を与える攻撃を加えてきた。

「あ、見つけた。間宮君の大好きなところ。ほおら、ここ押されたら嫌でも気持ちよくなっちゃうよ？」

「ッ、ああああうっ！？」

自分でも触ったことがない俺の中を熟知しているお兄さんは、少し中を探った後、とある場所に狙いを定めてきた。他の場所と違って少しふっくらとした一点を擦られると、ぶわっとお腹の奥に快感が広がる。無意識に腰が浮いて、勝手に指を締め付けていた。

何そこ、分かんないけど気持ちいい、嘘みたいに感じると、戸惑いながら彼を見る。するとお兄さんは、楽しそうに笑いながら再度同じ場所を弄り始めた。

「ね、気持ちいいでしょ。昨日もここで泣くほど感じてたよ」

「んあ、あ、あ、や、なに、そこお...っ！んん、あ、待って、お、しちゃ、あ、あっ！」

「大丈夫。俺、絶対痛くしないから。だから間宮君は、気持ちいいってことだけ考えてて？」

「ひう、あ、あああああっ！！」

素早く指でしこりを擦られると、耐えきれなくて身もだえてしまう。ビクビクと腰が揺れて、上半身を右に左によじって快感を逃がそうとしていた。それでも執拗に押される例の場所からは、絶え間ない快感が送り込まれている。

くちくちと卑猥な音を出しながら、尻の中を弄られるなんて。普通に考えたら気持ちいいわけがないのに、ありえないくらい気持ちいい。自慰よりもいいかもしれない。いや、また別種の快感と考えた方がいい。腹がぐつぐつと熱くなって、じわっと下腹部が切なくなる。イキそうでイケないのに、明らかに絶頂が近づいているような不思議な感覚。

それを俺は、なぜか初めてだと思えないのが不安だった。だから目の前の彼に縋るために、俺の腰をさする手を握る。

「んは、ああ、あ、気持ちい...！んっ、だめ、あ、アキ、さ...！？」

そして昨日と同じことをされたからだろうか。突然俺の口から、耳慣れない名前が出てくる。誰の名前なんだ？まさかこの人のものなのかと彼を見れば、お兄さんは今日一番驚いた顔で俺を見ていた。

「あれ？なんだ、覚えてんじゃん俺の名前。呼んでもくれないから忘れちゃったのかと思った」

「ち、が、たまたま、出てきて」

「んん？まあよく分かんないけど、合ってるからもっと呼んで？てか、俺のこと呼びながらイッて？」

「ひゅんっ！！？」

アキという名前を思い出したことが嬉しかったのか、お兄さんは一時的に目を開いていたけれど、すぐにさっきと同じ悪い笑顔に変わった。ただし手つきは変わって、指も2本に増やされる。質量が倍になっても痛みを感じないことがまず変なのに、いい場所を指で交互に弾かれるのがあまりにも気持ちよくて身体がのけ反った。それからグリグリと強めに押されると、きゅうんと下腹が重くなって、さっきまでは途中で止まっていた射精感が一気に高まる。

「ふああああゝ あっ！あああう、ん、んん～～ッッ！！」

「ほらほら、大好きなとこ擦られてイッちゃうよ？ねえ、イク時はイクって言う約束なんだけど。言わないと指止めちゃうよ？」

「はふ、ッ、あ、イク、イキ、ますう...っ！」

「名前も言って」

「ッあああ！イッ、く、アキさ、あ、イク、イク、んん、っひ、あ、あああああ
あああっっ！！」

アキさんから言われているのは身に覚えのない無茶のはずなのに、口と身体は彼に従順だった。なんで俺は、ここまで彼の言うことを素直に聞いてしまうんだろう。それが分からないのに、この気持ちよさは本物で虜になる。イキそうだと

思ってから全然我慢がきかなくて、全身を揺らして思い切り射精した。ガクガクと、出してから腰から下が痙攣していたことなんて、今まで経験がない。大きな絶頂の波に、思わず意識が持っていかれそうになる。

「んひ、ッ、あゝ、あうう...！」

「ちゃんと覚えてるじゃん、お尻のイキ方。まああれだけして忘れるわけないか。昨日もやだやだ言いながらイキまくりだったしね？」

「っ、そん、な、俺、覚えてない...」

「ふうん？なら、もう1回イッておく？1回じゃ足りないなら、何回もイッて思い出してもらわないと」

「ああう！？ううんっ、あ、だ、め、今ダメ、まだっ、まだあっ！」

「ダメダメダメ。気持ちいいの終わらせないよ？」

「~~~~ッッッ！！！」

呼吸の仕方も忘れてしまいそうな快感なんて、俺は知らないはずなのに。なぜか奇妙な満足感があるのが不思議だった。アキさんの言う通り、身体は覚えているというのだろうか。この未体験の絶頂を。

でも彼は、落ち着く時間も、思考する余裕も与えてくれなかった。イッても抜けていかなかった指が、もう一度あの場所を擦る。アキさんの指使いは手慣れているのに、俺には一切取り繕う冷静さが無い。バンッと腰が跳ねて、置き場の分からない両手でシーツを思い切り掴んだ。抵抗らしい抵抗もできない。唯一の抵抗として彼の手を拒むために内側に曲がった足は、悲しいことにアキさんの話術で抑え込まれていく。

「こおら。また足閉じちゃってる。気持ちいいときでも開いておくって、間宮君が自分で俺に言ったのに」

「んっ、んんう、あ、あ、ごえ、なさ、でも、でもおっ！」

「いい所トントンされたくないの？ふわふわするイキ方、いっぱいして気持ちよくなりたいよね？」

「あ、あ、あゝ あ...ッ！」

「そうそう、自分で出来て偉いね。いい子いい子」

彼が言うことが、嘘か誠か確かめる術はない。だけど身体には刻まれている。

きっと昨晚のアキさんに、嫌というほど教えられたんだろう。だから俺の俺の両手は、自分の膝の下に移動した。閉じそうになる足を、自ら閉じないように抱えるなんて信じられない。なのに自分の中では、どこかでしっくり来ているからなおさら意味が分からなかった。

まさか男の俺が、大きく足を開いて自らを差し出すなんて。圧倒的に抱かれる立場になっている。心はともかく、すっかり女のような身体になっているじゃないか。いや、まだ足を開くまでは男でも女でも、弱い立場になったらそうするかもしれない。でも一番信じがたいのは、この人に指で弄られてまたイキそうになっていることだ。

ぬちりと増えた指が、3本の指で俺の弱点を揉みくちゃにしている。ローションも足されてぬるつく内部で、3つの指がバラバラに動くのがあまりに気持ちよくて、次の絶頂は声が出なかった。

「~~~~っ、く！んは、ああ、ああうう...っ！！」

「あ、今イッた？ダメでしょ、イク時は自己申告する約束なのに。また分かるまでイカせないと覚えないのかな？」

「っ、は、は、まっ、て、やだ、も、やだああ...！」

「じゃあとびっきりかわいく『アキさんの指でイッちゃう』って言ってほしいな？」

「ひいあっ！！？ああっ！い、ま、今イッ、あゝ、あああ！！？」

ただし俺がいかなる状況であろうと、アキさんとかわした謎の約束は守らなければいけなかった。そして酷に責められたことで、ふと俺の頭の中に、記憶の一部がよみがえる。

ああ、そういえば昨日の夜も、訳が分からないままイカされたかもしれない。しかもイカされただけじゃなくて、彼の言うことを聞かなかったせいで、どんどん悪い状況に追い詰められた気がする。散々泣いて、泣いても許してもらえなくて、彼の許しがあるまではこっぴどくイカされた。

ビクッと、条件反射のように身体が揺れた。そして身体の状態と記憶が結びついたからか、適切な言葉はすぐに口から出てきた。

「いい、っく、イク、イキますう...！ひ、ッ、あ、アキさんの指で、イッちゃいますっ！！」

「俺の指で、どこをよしよしされてイッちゃうの？」

「はふっ、んん、お、れの...っ！あ、あ、女に、なる、とお...！」

「ふふ。間宮君が思い出してきてるみたいで嬉しいな。じゃあかわいく言えたから、間宮君がメスイキするの許してあげる」

「あ、あ、イクイク、また来て、あ、はっ、ッううううんんっ！！！」

心の抵抗が減ったからか、ひと際大きく下半身が揺れた。ガクガクと膝を震わせて絶頂を迎える。そしてメスイキという言葉通り、俺の熱からは何も出てこない。マジでケツだけでイッてんのかと、事実を目視して余計に絶望した。いったい俺は昨日、どんな開発をされてここまで仕上がってしまったんだ。

「っ、はあ、はあ、はあ...！」

「どうしたの。そんな切なそうに見て。ここ、触ってほしくなっちゃった？」

「うは、あああ、あああんんッ...！」

だけど俺が熱心に自分の中心部を見ていたせいで、アキさんに悪戯をする機会を与えてしまった。中に入っていない方の人差し指が、ぬるりと上から下に、触れるか触れないかの距離でひと撫でしてくる。それだけで期待感がぐっと高まって、手の方に腰を押し付けてしまった。もっと触ってくれと言わんばかりの行動を取ったのが恥ずかしくて、かっとなら顔が熱くなる。なのに触ってほしいのは本当だから、前と後ろ、どっちに腰を動かしたらいいかわからなくなって、ただ震えた。

「〜〜〜ッ！ふ、う、うう...！」

「顔が真っ赤だよ間宮君。そんな今更恥ずかしがらなくていいから。もう君、随分エロい格好してるし」

「そ、れはっ」

「それとも恥ずかしいの全部忘れるくらい、気持ちよくなった方がいい？」

「ンくうっ！？」

けれど、百戦錬磨のアキさんは分かってる。こうなった俺を、どんな風に責めたら効果的なのかも。だから中に入った指でゆっくりいい場所を撫でては、前で昂る熱にも意識を向ける。

するり、するりと内ももや際どいところを手のひらで撫でて、期待感を高められた。そして自然と自分の熱に動く指に意識が集中したとき、ほんの少し、掠める程度に触れてくる。その些細な触れ方でも大きく腰が動いてしまって恥ずかしい。なのに羞恥で心を満たす前に、中の指が快感を流し込んでくる。

気持ちよくて、恥ずかしくて、なのにやっぱり気持ちいい。交互に繰り返されると、どんどんわけが分からなくなる。なんなら、恥ずかしいのも気持ちいいと思うようになっていて、余計に混乱は深まった。

「あはうっ！んふ、ふ、ふっ、ふう、んんんん...！」

「どんどん声がだらしなくなってるよ？身体がエッチになってきてるね」

「はあ、はあ、あ、も、もお、嫌だ...！イカせて、全部、イカせてえっ！」

「え〜？イカせてあげてもいいけど...。どうしようかなあ？悩んじゃうなあ？」

「くふあっ！あゝ あ、それッ、それ無理、やえで、イカせて、もお、もおおお...
ッッ！！」

ローションで濡れた中指で、カリの裏を優しく撫でられる。もどかしい快感に、ベッドの上の身体がぎゅんと反り返った。気持ちいいのに、快感としては弱くて切ない。今すぐイッてしまいたいくらいに高まっているのに、出すことはできなかった。もちろん、中でイクこともできない。前進も後退も許さないアキさんに、身も心も弄ばれている。それが分かっても従順なのは、いったい何でなんだ。

別に膝を抱える両手を前に持って行って、自分で扱いたらい。それで必ずイケるはずだ。でもそれをしてはいけないと、本能が全力で拒んでいる。記憶にないのに、身体がアキさんに従う姿勢を絶対に崩さない。

だから俺は、彼に頼むしかない。生かさず殺さずを続ける憎い指先を止めてくれと。そんな生殺しは止めて、さっさととどめをさしてくれと、半泣きで彼にすが

「はひっ、ひっ、も、アキさん、お願い、い、イカセ、てっ、お願いします、お願いしますう...っ！」

「本当に何も覚えてないのってくらい素直だね。それとも、なんとなく俺にお願いしなきゃって思ってるのかな？」

「わ、かん、な、い、でも、ちゃんと、アキさんがいいって言わないと」

「そうだよ。間宮君が自己申告しないとイカせないし、俺がいいって言わないと君はイケない。そういう風に昨日教えた。だけど、せっかくだから昨日はしてないことも教えてあげるよ」

「してない、こと...？」

「じっくりじっくり、じわじわ時間をかけてずっとイキ続ける。そういう体験もしたいよね、間宮君？」

けれど俺の願いは、濡れた手で頬を撫でる彼には通じなかった気がした。ただ普通にイケたらよかったのに。変にねじ曲がった受け取り方をされて、良くない形で実現されてしまう。

「昨日は間宮君に、出さなかったら何回でもイケるってことは教えたんだ。出さないって言うか、お尻でイクならってことなんだけど。でもね、昨日はイキ方をメインに教えたから、ゆっくりイカせるってことはしなかった。徹底的にイカセはしたけど」

「あは、あ、あう、うう、ううう...!？」

ぬりり、ぬりりと、中の指がゆっくり動く。その緩すぎる動きでも、俺の中はしっかりと彼の指先を感じ取って、無理矢理にでも快感を拾っていた。だけれど小さな動きを追い過ぎるせいで、勝手に中が過敏になっていく。

しつこく擦られるうちに、最初は微弱だった波が、徐々に大きくなっていく。腰がふわりと軽くなって、背中と足がゾクゾクし始めた。それが時々ふと訪れる程度ならいいのに、むしろ震えるほど感じる時間は段々と長くなっている。

「んふあゝ、あっ、まっ、アキさ、も、だめ、変ッ、これなんか変っ!!」

「いいよ？変になっちゃって？」

「ッひう!!？」

そっと俺の耳元に口を寄せたアキさんが、ふう、と耳に息を吐く。空気が耳の中をくすぐる感覚で、一気に全身の性感が高まった。ガクッと喉がのけ反って、ギリギリのところで踏みとどまっていた何かが崩れ始める。

ぬるぬる、ぬるぬると擦られるあの場所から、ぐわっと快感が押し上げてきた。

ああ、無理だ、もう我慢できないと歯を食いしばった瞬間、きゅっと乳首をつねられて完全に決壊が崩れる。

「くふうううう...ッッ！！んは、あ、あっ、〜〜〜っあああああゝ！！」

でも俺の中の我慢の壁は崩れても、流れてくる快感は決して強烈ではない。じわり、じわりと、大きく割れたヒビの隙間から溢れてくるような感覚だ。けれどその快感の量は一定で、濁流のように一気に流れ込んではこない。反面、染み出てくる分が減ることはない。

たとえイッている間でも関係なかった。気持ちいいところが、アキさんに撫でられ続けている。イッたのに、もうイキ終わりたいのにと彼を見ても、しれっととぼけた笑顔で誤魔化された。

「んああ、あっ、アキ、さあ...っ！ひ、ううっ、お、俺、イッ、イッて...！」

「うん。気持ちよさそうだなあって思って見てるよ？」

「っく、あゝ、あふ、うう、ゆ、び、指い...っ！もう、止めっ」

「止めない止めない。止めないからまだまだイキな？」

「っ、っっ！！ま、あ、あっ、だめ、来る、次の来て...！っ、っくううん！！」

ジクジクとイッた直後で疼く中をかき混ぜられると、どうしようもなく気持ちよくて、はしたない声を出してイッてしまう。それが2回くらいならまだ分かるけれど、3回、4回と続けられると話は変わってくる。

正直、無理矢理一気にイカされるよりも、一撃分のパンチは弱い。とはいっても、回数が重なれば意味がなかった。5回目になると、そろそろ前後の絶頂の境目も分からなくなって、とうとう延々とイクだけになり始めた。嘘だろ、これって休憩もなくイキ続けるのかよと、さすがに自分で足を持っていられなくなって、アキさんの手を掴む。

「やあゝッ！！もお、もおいっ！もおっ...、イクのいいからあっ！」

「じわじわイクのも教えるって言ったでしょ？あと10分は頑張ろうね」

「無理ッ、無理無理無理ッ！！っひ、ああああ嫌っ！イク、イク、おひり、おかひ、く、なっで...！ああっ、あゝ、あああああっ！」

「たくさんイッて、とろとろのお尻の中をもっとエッチにしようね？」

「んんんんううっ！！はっ、はっ、も、だめええええゝえゝ...っ！んんんっ！ん〜〜〜〜ッッッ！！！」

だけど俺が必死に訴えても、アキさんの手を握っても、彼は止めてくれなかった。それどころかここから10分という、途方もない時間を提示してくる。絶対無理だ、あと1分も、いや、10秒も耐えられない。今すぐ終わりたいのにどうして

と、ベッドの上で暴れる。でもイキ過ぎると暴れる元気もなくなって、時間が経つにつれてどんどん戦況は悪化した。

最後の方なんて俺がうつ伏せになった状態で弄られまくるという最悪な体勢で、一方的にイカされまくって本当に頭がおかしくなるかと思った。

「はぁうううんっ！！ンンううっ！！はぁあ、あゝッ、いぐっ、っ、う、ううっ、んんんんっ！」

「ほんとにエロエロだよな〜、間宮君の身体って。昨日と合わせて、100回くらいはイッてるんじゃない？」

「んふっ、も、溶けちゃううう...ッ！許して、そこもう、ううっ、うううううんっっ！！」

「残念だけどまだ時間じゃないよ？あと2分だから頑張れ〜」

「〜〜〜っっ！！ふぐっ、う、――っンン！！っひ、ひ、イク、イクううゝううッ！！あゝっ、だ、だめっ、イクのもお嫌...！助けっ、あ、ああああああっっ！！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー